



TITLE:

明治維新の権力基盤(Abstract_要
旨)

AUTHOR(S):

芝原, 拓自

CITATION:

芝原, 拓自. 明治維新の権力基盤. 京都大学, 1968, 文学博士

ISSUE DATE:

1968-05-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212850>

RIGHT:

【 1 】

氏 名	芝 原 拓 自
	しば はら たく じ
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	文 博 第 13 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 43 年 5 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 国 史 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	明 治 維 新 の 権 力 基 盤

論文調査委員 (主 査) 教 授 小 葉 田 淳 教 授 赤 松 俊 秀 教 授 前 川 貞 次 郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は序章および第一章以下三章より成る。序章では、本論文は封建体制の倒壊、明治維新の実現までの政治過程を、諸政治勢力の推移とその政治的社会的基盤の形成に焦点をあて分析するものであるという。従来の維新政治史研究が維新の主体勢力の形成を、藩政改革派—尊攘派—倒幕派—維新官僚という、政治勢力の単線的な形成・転回の過程においてとらえる態度を退けて、改革派・尊攘派・倒幕派の三者が対立し相互依存する政治勢力とし、複線・複々線的な姿勢においてとらえる見解に立っている。かくて、第一章 改革派支配体制の歴史的な性格、第二章 尊攘派の階級基盤、第三章 倒幕—絶対主義化の権力構造とし、それぞれの章で肥前藩・水戸藩・長州藩の維新過程への参加の姿勢を分析し、本論文の課題に答えている。

第一章では肥前藩の天保期より維新政権成立期にいたる改革派支配体制を分析する。この藩では苛酷な封建的搾取のもとに、農民の商品生産は乏しく、水田農業地帯に地主制も未発達であり、藩財政は極端に緊迫し家臣団は窮乏を加えた。天保元年藩主直正の襲封とともに改革派が登場するが、改革の基調は、藩収入において本年貢収入の比重を高めるなどの封建的健全財政と、人材の選任・文武奨励などの藩権力の強化にあった。均田制の施行も、本百姓維持方針を貫徹したものである。しかるに對外危機に直面するや、改革派は過敏に軍事に対応して軍制改革を推進し、国産奨励・藩の通商などの経済政策をうち出すのである。かかる藩自体の商人化が領内経済の一般的発展とかかわりなく、また農民の隷農制的支配の再編強化のなかで推進された。改革派は幕藩体制自体を肯定するが、現実の幕府・諸藩は信頼せず、自藩の割拠体制を強化する。彼等は公武合体運動に参加し、政治的地歩を獲得する準備として強大な軍事力の養成・温存に腐心した。しかしこれが、肥前藩のみでなく改革派一般の性格でもあると著者はいう。改革派の「申し子」として、嘉永いらい尊攘派が生まれ、天子への一元的な権力集中を要求する「鬼子」となったが、自らの政治勢力を結集し得ず、改革派および他藩の倒幕派へ依存する存在であった。しかし、やがて公武合体・雄藩連合が倒幕運動の成長のまゝに敗退する過程で、改革派支配体制のもとに集中強化された権力・武力が倒幕の基盤としての意義を持って生かされるのである。

第二章は水戸藩の尊王攘夷運動とその政治的社会的基盤を分析している。文政12年藩主斉昭の襲封とともに始まる後期水戸学派＝藩政改革派の改革において、その徳化主義支配護持のための防波堤であり、天保年間実施の検地とそれにつづく限田政策は本百姓支配の貫徹を志向したものである。かかる隸農制の強化と、人材登用による政治機構の簡素集中化、軍制改革を背景として、水戸藩の有名な党争が展開する。斉昭襲封より斉昭の幕命による謹慎までの第一期の政争は、基本的には改革派と門閥上士層との政権争いであったが、安政以後の第二期の政争においては、改革十五ヶ年の実践を媒介とし、下士層・豪農層が政治的に進出して参加し、独自の尊攘運動を喚びおこした。すなわち改革派の水戸学的理論と実践のもとに教化された下士・郷士・神官・村役人・地主層は政治的軍事的に結集されて農兵隊を組織する。この農兵隊は一般農民属とは身分的に隔絶し特権化を望み、藩士正規軍へ従属するという、中間的封建身分制的軍隊の性格を持った。政争は幕閣・藩重臣層と改革派・尊攘派または改革派のなかで鎮派と激派との内訌として拡大するが、和親条約・將軍継嗣問題・攘夷勅諭問題などの情勢緊迫化につれて、激派の単独行動を激発させ、ついに筑波山挙兵を機に全面的の内乱が爆発する。これら尊攘激派の義挙は、封建制の内外的危機に直面して、政治的社会的中間層の狂信的現状打破の大衆の爆発であり、国体護持一実封建的半封建的特権とその基盤の護持に上昇一の武力万能の決起であった。激派は一般農兵層を軍事力に組織したのではなく、かえって生産と生活を守る農民自衛軍のために攻撃された。すなわち尊攘激派は水戸藩のそれに限らず、武士とブルジョアとの同盟ではなく、また即自的に反封建性を内包したものでなく、幕藩封建制の危機にあたり「旧権力の基盤拡大と集中強化」の方向で再編しようとするものであると、著者は性格づける。

第三章では長州藩においての、討幕指導層の台頭にいたるまでの政治権力を分析する。長州藩では肥前藩・水戸藩にみられなかった、防長瀬戸内中心の自生的な農民的商品経済のある程度の発展があり、前記両藩と異なる農民層分化の特質を生み出した。この藩においての封建的支配体制の危機は、封建的経済の衰退一般からでなく、その内部に一面の小ブルジョア的近代化を秘めた瀬戸内中心の農民経済を背景として深刻化した。天保2年の大一揆爆発の直接の契機は農民的商品経済の領主的統制、すなわち専売制度への大衆的反撃であったが、貧窮農民の世直し一揆の爆発をも包含したのである。この大一揆を背景とした長州藩の藩政改革も、本年貢を基調とする緊縮財政であり、他面では自国産の商品的物産をどこまでも藩の経済統制のもとに組織しようとした。こうした反動的政策は農民内部の社会的分業＝局地的市場圏の進展という事態と矛盾する。これら諸政策の破綻の過程は、対外危機の深刻化につれて、藩士層の危機意識をいっそうかきたて、現状打破の広汎な政治的精神的沸騰を招き、権力集中化の地盤を産み、尊攘運動を昂揚させた。文久期に入り、攘夷のため朝権のもとに幕藩全支配階級の結集を主唱する攘夷藩論が成立して、藩庁事務の簡素化・機構集中化が推進せられ、軍事的戦闘体制の確立がめざされた。奇兵隊および諸隊の結成では、対外危機の凝集した死地の渦中で一挙に尊攘派下士層・村役人豪農層までが動員組織される。第一次長州征伐・四国連合艦隊下関砲撃事件により門閥上士層＝俗論派の藩長が成立するが、慶応元年また尊攘派＝正義派の支配体制が確立する。この内乱はやはり門閥上士層と下士激派の政治闘争であり、下士層に従属し追隨した村役人層を媒介として、一般農民は動員され利用されたのである。かくて「防長二国は今日より戦場」との非常事態に照応して、討幕派のヘゲモニーのもとに推進された諸改革

は、藩の軍事的支配機構化に帰結するといつてよい。政治機構の官僚制的簡素集中化と、藩庁に新鋭な武装の常備軍の軍隊が一元的に掌握されたことは、藩の絶体主義的権力機構の体制的確立を意味する。討幕派は、幕藩体制を根本から否定する支配秩序を考えたわけでない。討幕も幕府の独裁制の修正が武力による決裁以外にないという状態に追いこまれたとき、はじめて決断される。しかも討幕戦争は、改革派支配体制の域にとどまる薩摩・土佐・肥前等の諸雄藩との軍事的政治的結合の上で進められた。この戦争が不可避免的に全国的権力集中の絶体主義を推進させて維新が招来された。したがって幕藩領主制の否定＝版籍奉還・廃藩置県は、中央政府の政治的軍治的基盤の強化のあとより、その矛盾の結果として生まれるのである。

論文審査の結果の要旨

著者は本論文において、維新の主体政治勢力である藩政改革派・尊攘派・倒幕派の政治勢力の展開過程を、農民・土地政策を基軸に分析して、これらの諸勢力は等しく封建支配者の階級基盤の上に、類似の運動方向を持っていたこと、また政治諸勢力の展開過程を、改革派—尊攘派—倒幕派—維新官僚という単線的な形成・転回としてとらえるのでなく、複線・複々線的な相互の対立依存においてとらえねばならぬこと、その激動した政治過程のなかより維新変革が生み出されたことを、緻密な実証・鋭利な理論・見事な構成をもって、あざやかに動的に描いている。これは従来の幕末維新政治史に、みられない著者の独自の見解である。また、本論文の諸所に、著者の新研究や創見が示されている。肥前藩の経済構造の分析・長州藩の商品経済と専売政策の推移には、ゆたかな新研究が織り込まれ、水戸学イデオロギーの封建性・尊攘激派の歴史的役割には、鋭い新解釈が加味されている。本論文には、肥前・水戸・長州の三藩のほか、諸雄藩の政治諸勢力にも触れてはいるが、少なくとも薩摩藩について、三藩に対すると同じ水準の分析が行われることが望まれる。しかし本論文は近時において最も優れた幕末維新政治史研究の一つであり、またその一つの到達点を示したもののといえよう。

よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。